

配信中

めがみ
女神
チャンネル!

え、これ
売名
ですの!?

徳山銀次郎
イラスト Shri

特別試読版



プロローグ



Y o u T u b e r、ゆうだちあかひと 夕立朱人の朝は早い。

早朝五時半には目を覚まし、二度寝することもなくベッドから身を起こす。軽いストレッチをしたならば、すぐさま二階の自室から一階にある洗面所へと移動、冷水で顔を洗い、歯を磨き、シャキシャキと規則正しく動く。完全に眠気を取っ払ったあとはダイニングに向かい、電気ポットに水道水を汲くんでスイッチを入れる。湯が沸くまでの間はベランダに出て、趣味で育てているプチトマトに水をやる。

葉の上には米粒ほどの小さな蜘蛛くもが一匹。それに気づくと蜘蛛のお尻しりを人差し指でつつきながら、優しく手のひらに載せる。

「ほーら、おまえのイサはこのトマトじゃないぞー。こちで立派な巣をつくれー」

朝の蜘蛛だったか、夜の蜘蛛だったか、どちらかを殺すのは良くないだなんてことを、昔に祖母から聞いたことがある。どちらか覚えていないなら、とりあえずどちらも殺さなければいい。そもそも田舎いなか育ちなので虫が嫌いなわけでもなく、わざわざ無駄な殺生せつじやうをする必要もない。

ベランダの隅に蜘蛛を逃がしてやると、そのままリビングに戻り、台所の床に邪魔くさく置かれた大きなダン

ボール箱からカッププラーメンを一つ取り出す。通販で箱
買いたしたプライベートブランドの1000円にも満たない
主食である。

ここ数日このカッププラーメンしかお腹なかに入れていない。
なぜかと聞かれれば、言うまでもなく金欠だから。この
カッププラーメンが生命線なのだ。

「いただきます」

食前の挨拶あいさつはしつかりと声に出す。両の手のひらを合わ
せ一礼。親の教えが良かったのか、そういつたところは
律儀にこなす。

ゆっくりとその味を噛かみしめながらテレビをつけ朝の
報道番組を見てみれば、いつも通り六時半を迎えている。

毎日寸分狂いないルーティーン。これまたいつもの通り二十五分間だけテレビを見ると、二階の自室へと戻る。そして、撮影機材の準備をし、カメラの前に座った。毎朝七時から欠かさずに始める動画撮影。

Y o u T u b e r ならばお決まりの定番挨拶がある。

「はいどうも」「ハロー」「こんにちは」

しかし彼の場合は少し違う。

ほっぺたを両手でパンパンと二度叩いたならば、自身に言い聞かせるように「よしっ」と声を出す。

そして夕立朱人はスイッチを入れた。

「よし、くずども」

炎上系YOUTUBER、夕立朱人の朝は早い。



引きこもりYouTuberが
久しぶりに外に出てみた



五月十八日、昼過ぎ。

グリグリ、グリ。

ゆうだちあかひと

夕立朱人は左手の親指でジョイスティックの先端を上下に何度も動かしていた。

ピコピコ、ピコ。

その動きと連動するように画面上のカーソルが位置をずらす。

攻撃値、防御値、魔力、素早さ、運……。

「あー、どれにしようか迷う……。」

朱人が手に持っているのは人気メーカーが発売したばかりの携帯ゲーム。テレビにつなげれば据え置き機としても使える、今流行りに流行っているゲームだ。そのゲームの中でもひとときわ人気があるRPGソフトのステータス画面。

「せっかくのフルステータスアップアイテム……どれを特化させるか、くそ迷う！」

一旦ゲーム機をテーブルに置いて、朝食とまったく同じカップラーメンをすすりながら夕立朱人は頭を抱えた。そして座っていたソファに深く背中を沈め、一人きりのリビングでつぶやいた。

「なあ、どれがいいと思っ？」

独り言ではない。一見、いもしない誰かだれに向けて話しかける危ない奴やつにも思えるが、今はちゃんと相手がいる。これは動画撮影で、この様子を後々見るであろう人たちに向けて喋しゃべっている……というわけでもない。リアルタイムで相手がいる。

テーブルの上に置かれたノートパソコンの画面上にコメントが流れている。コメントを打っているのは俗にリスナーと呼ばれる視聴者。そのリスナーに向けて朱人は喋っているのだ。つまり危ない独り言でもなく、動画撮影でもなく、これは生配信なのである。

『なんでもいいだろ』『本当おまえ優柔不断だな』『どうせ流行りにのっかってやってるだけだからすぐ飽きるよ』

『そんなことよりこの前の物申す動画、また炎上してたな』『こいつの場合わざと炎上狙ねらってる』『すぐ売名したがるからな』『朱人きんもー』『でも朱人の物申すは割と正論だけどな』『正論だからこそ物申された側の信者がアンチになって炎上するんだな』『いや朱人がただ嫌われてるだけ』『www』『それなwww』『間違いないwww』

次々と流れてくるリスナーのコメントは辛辣しんらつだ。なぜなら、朱人のリスナーは一割の新規と一割の固定ファンと八割の固定アンチで構成されているからである。

「てか、そうだよ。その動画も炎上してる割に全然再生数伸びてないし、どうなってるの？ みんなも知ってるの、俺おれのアカヒトチャンネル、登録者すごい伸び悩ん

でるんだけど」

『知ってるもなにもしそれが通常状態』『登録者数が伸びてた時がまずない』『朱人今日もキモいな』『流行りのネタに食いついて売名狙ってるのがバシてんだよ』

「いや、みんな、真面目まじめに聞いてくれって。他の動画も再生数まったく伸びないし死活問題なんだよ。もうカップラーメン生活飽きたんだよ。この時代にカップラーメンしか食ってないこんな貧困な高校生いるか？ いないだろ？」

『え、朱人って高校生だったの？ 学校行ってないのに？』『高校生名乗るなwww』『高校生×リート○』『星崎ナイトをデイスる動画出して炎上させることしかしてな

いからだよ』『大物Youtuberの名前使わなきや再生数稼げないんでしょ』『自業自得。炎上系狙ってブランドイング間違えたな』

「そんなこと言っただって、なんだよ！ 俺が炎上系や物申す系以外のネタを撮ったところで面白い動画になるおもしろと思う!? 無理だろ！ 無理じゃない？ 無理だと思っ」

『確かにwww』『素直www』『潔つねみよい自虐じこくやめろwww』

『まあ、炎上系の才能だけはあるからな』『それしか能がないんだろ』『それな』『むしろ俺らリスナーがいるだけでも奇跡』『朱人かっこいい。ナイトよらおもしろい』『なにこの信者』『そいつピーチひめとかいうYoutubeのコメント欄でいつもあば暴れてる信者だから気にするな』『またピーチひ

めか』

次々と流れてくるコメントを目で追いながら朱人は、カップラーメンの麺を全てすすり終え、スープを飲み始める。そしてそれを飲みほすと、カップの底をリッスナーに見せるようにカメラへ向けた。

「ほら見る、おまえら。俺の昼食はあっという間に終わったぞ！ 今月はずっとこのラーメンで生活なんだぞ！ ううう、美味いもん食べたい。助けるよ、おまえらあー！」

『泣くなwww』『てか自炊しろよ』『まあ、一人暮らしの男子高校生に自炊はハードル高い』『高校生×二』『そのネタを止めろwww』『いや意外と朱人は自炊とかでき

ると思っぞ』『ネタでカップライメン生活？』『かもね』『どうでもいい』『それな』

朱人はしっかりとごちそうさまの挨拶あいさつをしたあと、リスナーたちのコメントに注意を戻す。

「だいたいなんであんなインチキ超能力者が登録者数二〇〇万人も行ってるの？ やばくない？ あんなんフイクに決まってるじゃん。みんな信じてるの？？」

『まーたナイトのデイスが始まった』『これは朱人に同意。ナイトの超能力は怪しい』『いや動画見てこいよ。あれは本物』『朱人の呪のろい設定よりはマシ』『それなwww あまえが言うなwww』

「いや、俺の呪いは本当だっていつも言ってるだろ。ほ

ら、これ」

朱人はTシャツを胸の位置までめくりリスナーに見せつける。

朱人の胸には黒い歪^{ゆが}みのような傷跡があつた。握^{にぎ}り拳^{こぶし}ほどの大きさをしているその傷は生々しく皮膚を歪ませている。

『でたwww 呪いで受けた傷www』『はいはい手術痕』
『あ、今日も呪い設定か』『死の呪い。朱人は死ぬ』『死んでんなら早く成^{じゆ}仏^{ぶつ}しろよwww』『その前に病院いけ』

「ああもう、ちよつと待つてなよー！」
そう言い残し、朱人はカメラの前から席を立った。そのまま向かった先は隣の部屋。室内は家具やダンボール

が散乱し、物置き状態である。その中を泳ぐようにかき分けながら進み、小さなダンスに手をかける。一番上の引き出しから取り出したのはキャラクター物のぬいぐるみ。手のひらに収まるほどのサイズだ。

名前はオツグマン。戦隊物をモチーフにしており、数年前に朱人が住むこのおぐま小熊市のご当地ヒーローとして多少の人気を博はくしていたが、市認定のゆるキャラが出てきてからは表に姿を見せることもなくなり、今では地域住民にも忘れ去られているキャラクターである。

そんなほこりまみれで灰色になったオツグマンは胴体に御札おふだが螺旋状らせんに巻きついていて、ヒーローの面影おもかげもない異様な見た目をしている。呪いの人形と言われても違和

感ないだろう。朱人はそのオツグマンを右手で握りながらリビングへと戻り、そのままカメラの前に差し出した。

『でたwww オツグマンwww』『なにこれ？ こわい』
『呪いのオツグマン、キターー！』『え……なにこれ』マジでやばいやつ？』『オツグマンwww』『呪いのオツグマン。朱人は死ぬ』何回朱人死ぬんだよwww』

「いいが、これは呪いのオツグマンなんかじゃない、逆だ。このオツグマンが呪いを抑えてくれてるんだ。この御札を取ればたちまち呪いは力を取り戻し、俺の周りは死で溢れかえる！」

『朱人ってこんな厨二病だったの？ キモwww』『いやこれが朱人スタイルだから。にわかにはかえれ』『朱人はや

く病院いけー』『もうその呪い設定飽きたから次の設定よ
ろ』『引きこもり過ぎて頭おかしくなっただ例がこちらです』
『てかなに、このエセヒーローみたいな』『いやほら、
朱人ってヒーローに憧^{あこが}れてるところあるから』『炎上系な
のにwww』『朱人実は純粹説www』『厨二すぎるwww』
「俺は厨二じゃない！ 厨二は星崎ナイトじゃん！ 俺
じゃないだろ！」
『wwwwwwwww』『確かにwwwwww』『ナイ
トの厨二はあり』『朱人激怒www』『きんもーwww』
ww』
「まったく……あれ、もう時間か。じゃあ、みんな頼む
ぞ！ もっと登録者増えるようにツイッターとかでアカ

トトチャンネルの宣伝してくれよ」

『だまれwww』『売名www』『うるせーわ売名野郎』『任せて朱人！』『ピーチひめもだまれwww』

流れてくるアンチコメントを見ながら朱人は撮影のスイッチをオフにした。

一息だけつくとゲームのセーブだけして、オツグマンを元の引き出しへ戻しにリビングを出る。数分後、再びリビングへ戻ると朱人はソファへと身を投げた。

毎朝の動画撮影、そして撮り終えた動画の編集作業は大変だ。午前中は撮影で潰れ、編集は夜までかかる。

……その合間に朱人はこうやって少しの時間だけ生配信をすることがある。

それは朱人にとって休憩みたいなものである。
だだっ広い田舎いなかにあるだだっ広い一軒家。家の中には
朱人以外、誰もいない。

一年前までは両親と妹が一つ屋根の下で暮らしていた
が、ある日に父の仕事上アメリカへ居住地を移すことと
なった。当たり前のように家族は日本を離れる準備をし
たが朱人だけは違った。この小熊市に残ることを決めた
のだ。なぜかって、理由は簡単だ。

彼が引きこもりだからだ。

引きこもりが海外に行けるわけがない。なんせ家から
すら出ないのだから。

結局、朱人だけがこの家に残った。

父親は朱人のわがままに、残るなら生活は自分でどうにかしろと突き放した。いや、実際は家を引き払うわけでもなく、朱人一人のために維持をさせる費用を許容するのだから、息子のわがままを受け入れる甘い選択をしてくれたのだろう。

朱人も当然のようにその条件を受け入れた。別に父親の発言に対してケンカを買ってやったということではない。もともと持ち家なので家賃はかからないし光熱費や食費だって一人分なら大した金額にならない。ならば自分で稼いだ金でやりくりできる。なんせ朱人はその頃から YouTuber として活動しており、小遣い程度こづかの金額なら稼げていたからだ。

自分が好きでやっていること。自分が見つけた好きなこと。そのことに朱人なりのプライドと真剣に向き合う覚悟がある。『好きなこととして生きる』それがYoutuberのキャッチフレーズ。炎上だつて売名だつて、Youtubeに関しては真剣にやるのが朱人のポリシーだ。だから朱人はYoutuberを日本で続けるためにも残ることを決意した。

と、いったものの、やはりなんの才能もない、ただの平凡な高校生がYoutuberの広告収入だけで一人暮らしをするのはちよつと厳しかった。そんなに現実は甘くなかった。

ゆえに貧困生活。せつせつと真面目に撮影をし、ほぼ毎日

動画をアップしているの、最低限の生活はかろうじてできていたが、まあ、贅沢ぜいたくはできない。

しかも周りに頼る人もなく一人での生活。ポツンと広い家で残った引きこもりの生活。

だから、朱人にとって生配信とは休憩なのである。誰かとコミュニケーションが取れるたった一つのツール。引きこもりの、なにかを紛まぎらわすための休憩。

とはいえ、これはこれで朱人は気に入っていた。この生活の方が学校へ行くよりが、何倍も楽しい。

気づけば高校三年生。受験のことなど考えていない。そもそも出席日数が足りない。でも気にしない。

YOUTuberで一発当てて大物になればいいのだ。

夕立朱人、最高の引きこもり生活である。



翌日、五月十九日。始まりは唐突だった。

珍しく寝坊をし、十時過ぎに目を覚ました朱人は自室から台所に向かった。

昨夜は編集作業でかなり寝るのが遅くなってしまった。その影響が出てしまい四時間半も遅れた起床。だが、幸い今日は日曜日。日曜は動画撮影を休む日だと自分の中で決めている。なので、多少の寝坊は許容範囲だ。これもセルフマネージメントの一環である。

右手でスマホをいじりながら、コップ一杯分の水道水を喉^{のど}へ流し込む。

そして、水を飲みほしたあとに、ようやく朱人はその事実を知った。

『【速報】東京タワーになんかいるwwwwww【画像あり】』
まとめサイトのアプリを開き最初に出てきたタイトルだ。

特にインパクトのあるタイトルとしてみわけでもないが、この異常さに気づけたのはその下に並んだ記事がほとんど同じ内容だったからである。

『【動画】東京タワーがなぜびこる』
『東京タワードットコムにこんなだけ』

『【悲報】東京オワタwwwwww【ドットコム】』

「いざいざ、ドラゴンて。なんのイベントだよ」
半ばバカらしいと思いながらも、ずらっと並ぶタイト
ルの中から適当に記事を選びタッチする。リンクを進ん
だ先にはなにが起こっているか一目瞭然いちもくりりょうぜんの画像が貼はられ
ていた。

東京タワーの展望台上部にドラゴンがいたのだ。

朱人は目を疑った。本当にだ。本当に本当に本当だっ
たのだ。

太い二足の足を器用に東京タワーに絡からめながら、さな
がら怪獣映画のように地上を見下ろしている。そんな画像。
ドラゴンといえば、ファンタジー世界に出てくる、あの
ドラゴんだ。翼はが生え、角が鋭い、長い鉤爪かぎつめを持つ、巨大



【速報】東京タワ

♡ 5.5K

東京タワーにドラゴンいだけど

♡ 3.2K

【悲報】東京オワタwww

♡ 4.0K



なドラゴン。

他の記事にも同じような画像が貼られている。いくつかが動画も上がっていたので確認してみると、どうもネタで作られたフェイクとは思えない。それくらいリアルで臨場感がある。

呆気にとられながらリビングのテレビをつけると早速ニュースでその話題が報道されていた。チャンネルを回しても全て同じ話題。あのテレビ東京でさえ取り上げている。あのテレビ東京がだ。まるでゴジラ映画の住人にでもなった気分である。

朱人はテレビの前のソファに座りめっくらとニュースを見た。どぎっざどぎっざのニュースは今日の早朝に姿を現し、

それから、かれこれ六時間近く東京タワーに居座っているらしい。幸い今のところ暴れる気配は見せずに大人しくしていて、東京が火の海になるなんて悲劇にはなっていないようだ。

防衛省の動きとしては現場周辺の封鎖はすませたようだが、ドラゴンに対してはなにもしない様子を見ているらしい。下手に刺激して暴れられてもいけないし、そもそもドラゴン対策のマニユアルがなく、絶賛会議中なのだろう。

一通り状況を把握した朱人は再びスマホをいじり始めた。ツイッターでは『ドラゴン』『東京タワー』が早速トピ入りしている。ヤフーニュースもドラゴン関係の

記事ばかりだ。

「うわー！ やっっちゃった、くそー！」

朱人は寝坊したことを深く後悔した。よりによってこんな日に。完全に出遅れた。

封鎖される前に現場に行って動画を撮っていれば、か
なりの再生数が期待できたはずだ。

今さら行っただとところで遠目からの微妙な映像しか撮れないだろうし、もうさんざんそれ関係の動画はYouTubeにもアップされている。

朱人の住む小熊市から東京までは新幹線を使っても二時間。労力と経費を考えても既に行く価値は皆無だ。ビッグウェーブに乗るタイミングを逃してしまった。

不貞腐れながら朱人は自室に戻りベッドに寝転がった。まあ、でも引きこもりの自分に東京まで行く体力なんてないし、まず、着ていく服がない。どっちにしろどうしようもなかった。そう自分に言い聞かせる。

そういえば数少ない友人のうち一人だけ東京住まいがいる。実際の様子はどうなのか気になり、その人物にLINEで連絡を入れることにした。

「ドラゴン出てるみたいだけど、現場はどうなの……っ」とメッセージを送ってからモノの数秒で既読になり返信がくる。相手も暇なのだろうか。

『見てないからわからない』

「東京に住んでて見に行っていないのが、もったいないな」
『見に行つて動画撮つてきてよ』

『面倒くさい』

「相変わらずだな……」

朱人は呆れあきながら寝返りを打つ。

『頼むよ』

『そのうち見に行くから見てきたら報告する』

この様子だと数日は報告がないパターンである。というか行くかどうかも怪しい。

もともと冷めた性格をした友人なので仕方ない。

あきらめた朱人は、返信せずにそのままスマホを放り投げた。

いったいなにが起こっているのか。あのドラゴンはどこから来たのか。そもそもこれは現実なのか。

天井を見上げ、さまざまな思いを巡らせていると、遠くで通り過ぎていくスーパーカブのエンジン音が、静かな部屋に小さく響いた。朱人はふと窓の外に目をやる。

朗^{ほが}らかない天気である。

まさか同じ日本であんな非日常が起こっているなんて到底思えない。

テレビもSNSもまとめサイトも、画面の先では大騒ぎしている割に、肉眼に映る風景はいつもと同じだ。

まるで自分だけ一人、蚊帳^{かや}の外に追いやられている気分だった。

この変哲もない日常がなにか劇的に変わるんじゃないかという期待で胸が躍る^{おど}反面、何事もなく過ぎていく弛緩^{しかん}された日常に、朱人は少しだけ嫌気がさした。



二日が過ぎた。

あれから相変わらず世間はドラゴンの話題で持ちきりである。当のドラゴンはとっつと未だ^{いま}に動きを見せず大人しく東京タワーに絡みついてくる。まるで蛇^{へび}のようだ。一部では『ドラゴンが体勢を変えようとして少し動いた時、背中あたりに小さく人影が見えた』だなんて都市伝説

的な噂うわさも上がり始めたが、真相は不明である。

朱人も結局このドラゴンの話題に便乗びんじようしてYOUTU
beに動画を一本上げてはみたのだが、あまり再生数は
伸びなかった。「あんなもの偽物にせものだ、騙だまされる奴はバカだ」
と炎上を狙って見たものの、リスナーにはウケなかった
らしい。まあ、いくら炎上系がスタイルとはいえ、さす
がにあれだけ画像や動画が出回っているものを偽物と言っ
のは無理がある。当然の結果だ。

昼過ぎ。そんな経緯もあり朱人は動画の挽回ばんかいをはかる
ための生配信をしていた。案の定コメントには動画の批判
ばかりが流れている。すべっっているだの、迷走しすぎだ
の……言うのは簡単かもしれないが、ネタを考えるのも

楽しじゃないのだ。

「わかってるよ。あの動画はすべった。俺が悪かったよ、ごめんな」

しかし朱人も長いこと炎上系でやってきているため、分が悪いつの対処も心得ている。

こういう場合は下手に反発せず、自分のミスを認めることによつてクールダウンを狙うのが得策だ。思惑通り、

次第に動画の批判をするコメントは少なくなつていった。これを機に別の炎上ネタへとシフトを試みる。

「ていうか困つてないやん？ あのままずっと放っておくわけ？ 急に暴れだしたらどうすんの？ ちゃぶくない？」

『自衛隊が見張ってるから大丈夫』 『都内住みだけど正直こわい』 『そう簡単に動けないんだろ』 『リアルにゴジラ映画みたいになってるな』

意外にまともな反応が返ってきてしまい、どうも盛り上がりにかける。 やはりこういう時は鉄板ネタを使うしかないようだ。

「国が動かないなら星崎ナイトが動けばいい。おいナイト、見てんだろ？ おまえのその超能力が活躍する絶好のチャンスじゃないか。その超能力でドラゴン退治してみろよ！」

『ナイトデイス始まった』 『ナイト関係ねーwww』 『ナイトは朱人の配信なんて見ません』 『確かにナイトの超能力

で退治できるんじゃないかね』『ナイト信者乙』『またナイト使って売名かよ』『持って行き方が強引ごういんだよカス』『朱人かっこいい』『信者つぜー』

上々の反応である。

「世界の危機だぜ？ アベンジャーズみたいなヒーローが必要じゃん？ おいナイト、おまえ本当に超能力者なんだよな。じゃあ世界を救う救世主になってみるよ。おまえがやるなら俺もやっつてやるぜー！」

『おまえがなにやるんだよwww』『やっぱり朱人はヒーローに憧れているwww』『むしろ危機でもない』『まだ被害出てないしなwww』『優しいドラゴンだったらどうすんだよ！』『ドラゴン、トセダチ、オレタチ、トセダチ』

『優しい世界』

緊迫感のないコメントだ。ただ、実際のところ朱人はそんな能天気なリスナーの心情を理解していた。おそらくコメントしている大半の人間は東京から離れたところに住んでいるのだろう。現場周辺に住んでいる人間は恐怖もあるだろうけれど、現場から離れている人間にとっては、「ドラゴンが出た」と言われても「自衛隊が出動している」と言われても、実感などわかないものであり、そういう危機なんて感じないのだ。

そもそもこのドラゴンは既に二日も大人しくしているのだから、それこそ凶暴な生物ではないのかもしれない。かといって、そんな風にリスナーに同意しているだけ

じゃ盛り上がらない。平和というのは退屈なもので、ネット世界でも和気あいあいの馴れ合いなど誰も求めていないのだ。少なくとも朱人はそういった信条でやっていく。これが炎上系と呼ばれる朱人のやり方なのである。もう一発、星崎ナイトの名前を使って暴言でも吐いてやろうか……と口を開きかけたその時だった。

瞬間——窓の外で閃光が走る。

眼球の奥を直接ついてくるような強烈な光が視界を真っ白く染め上げる。あまりの眩しさに朱人はたまらず目をつぶった。光が収まると朱人は、雷でも落ちたのかとす

ぐにカーテンを開けた。雲一つない晴天だ。

朱人は首をかしげ、パソコンの前に戻りコメントを確認した。

『なに今の？』『カメラ壊れた？』『なんか光った』『どうした？』

「いや、わかんない。雷がなんかかな」

そう言ったところで、今度はズンと地面が沈むくらいの強い衝撃と共に、尋常じゃないほどの大きな破裂音が鳴り響いた。

「うおおををおおー！」

似てはいるが雷の音ではない。地震とも違い、ほんの一瞬に全てのエネルギーを凝縮したかのような衝撃だ。

まるで巨大な風船が割れたかのような。

どちらにしる外でなにが起こっているのは間違いない。

『朱人ビビりすぎw』『なんかやばくね』『なにが起こっているの？』『外？』『朱人見てきて』

「え、やだよ外出たくないし」

『やすが引きこもりのかがみ』『それへん見に行けよw』『ついでに学校行ってこい』『それはやめたげてw』『動画のネタにならそつだし行けよ』『はやく外出しろきこい』
『も』

「ひんおいな……車の事故かなんかだろ」

『車は事故っても光りません』『引きこもり面倒くさがらすぎw』『東京のドラゴンみたいになんかあるかもだぞ』

『はよ行け』

朱人は少し考える。確かに奇妙な現象だし、本当に東京のような非日常的なことが起こっていたとしたらネタとしてはインパクトがある。あとでこの配信の様子を編集して動画投稿すればけっこうな再生数になるかもしれない。朱人は無言で立ち上がり、部屋の床に散乱した洋服の中からTシャツを一枚手に取った。

『おっ動いた』『引きこもりがやる気になった』『学校行くの?』『だからやめてやれwww』『さすが朱人わかってる』『いいねいいね』『はよはよ』

寝間着を脱ぎTシャツに袖そでを通す。そしてそのまま壁にかかっていたブレザーのジャケットとズボンを着る。幾日

ぶりだろうか、これを着るのは。

『え？ まじで学校行くの？』『なんでブレザー？』『初めて高校生らしい格好www』『なんでwww』

「着てく服がないんだよ！」

朱人は不貞腐れながら言う。

『wwwwww』『クソwww』『んきいもりあるあるwww』『確かにブレザーのジャケットでも羽織はつてればそれなりの格好にはなるなwww』『そのまま学校へ行こう！』『やめたれってwww』

「ちょっと見てくるだけだからな。そんな遠くまで行かないからな」

『おκ』『www』『ひびく言わぬはよ行け』『おひびく』

行け』

「スマホに切り替えるから一旦切るよ」

そうやって配信を切り、スマホで動画配信用のアプリを起動させる。そして外配信の準備をすませると、そのまま朱人は玄関へ向かい、かぎ鍵も閉めずに自宅前の公道へと足を踏み出した。

久しぶりの屋外。おくがい

やはり外の空気は苦手だ。学校の同級生に見られてい
るかもしれない。できるだけ下を向いて歩こう。

「見えてる？」

スマホで配信を再開し、リスナーに問いかける。

『おト』わこいっ』見えてる』わこいっ』ｗｗｗｗｗｗ』

そんな見晴らしのよさだからこそ、たった数分歩いただけで朱人はなにが起こっているのかを理解することができた。

数キロ先。近からずも遠からずの位置に見える山の小さな崖に、それはいた。

太ましい二足の足を崖の上に載せ、大きな翼を広げ天を仰いでいる。

「まじかよ……」

朱人はドラゴンを目にしたのだ。

すぐにスマホのカメラを向ける。

「おい、あれ見ろ！ いた！ いたぜ！ おい！」

『え？』『まじ！？』『二匹目じゃん』『キタ——』『二匹目ー』

『本物!?!』『やべー!』

「俺が見つけたんだよな！ 俺が見つけた！ やったー!」
『は』『オしらあが煽おらなきゃ外出なかつたくせに』『おまえ
の手柄じゃない』『俺たちのおかげ』

「とりあえずもっと近くに行って映そう。あー、ちゃん
としたカメラ持ってきてくればよかった」

朱人は公道を早歩きで進み始めた。二日前は出遅れた
が、今回は逆に一番乗りだ。胸の高鳴りが収まらない。
自然に口角が上がっていく。

「よっしや……っしやあ……!」

ドラゴンは山の中腹で地上を見下ろし鎮座している。
東京のドラゴンと同じで、暴れる様子はないようだ。

それどころか警戒心のカケラもなく、まるで犬のように片一方のうしろ足を上げ、鉤爪を器用に動かしながら首元をポリポリとかき始めた。

『なんがドラゴンがわいいなw』『ほのぼの』『名前つけよう』『ドラ太郎』『ネーミングセンスねーw』『オツグマン』『やめろw』

リスナーもその様子に、朱人そっちのけで談笑し始める始末だ。

これなら、もっと近づいても大丈夫そうだと、朱人はさらに早足になる。

姿は東京のドラゴンとほぼ変わらない。鱗うろこの色が東京の方は茶色に近かったのに比べ、若干こちらは赤っぽい

か。体長は二メートルを超えているだろう。とにかく、でかい。やはり画像や動画で見るとは大違いだ。生はすごい。これがライブ感というやつだ。

『朱人映像ブシすぎ』『もっ toch ちゃんと映せ』『見えねーよ』リスナーから入る注文に朱人は素直に従い、歩くスピードを緩める^{ゆる}。そしてスマホのカメラをしつかりとドラゴンの居座る山へと向けた。

別にリスナーに見せたいわけじゃないが、明確な映像を残しておかなければいけない。この映像をYouTubeに投稿すれば、間違いなく一〇〇万再生はくだらないだろう。一躍、時の人となってチャンネル登録者が増えてくれれば言うつことなし。

そういう意味では見晴らしのいいこのロケーションは撮影にピッタリである。山までの間を遮るような建物もない。撮影の邪魔になるのは、せいぜいビニールハウスぐらいなものだ。

朱人は初めて小熊市が田舎で良かったと思った。肥料ひりょう臭いのは許容できないうが。

それにしても、ドラゴンはなかなかアクションを起こしてくれない。存在自体が撮とれ高だか抜群なので画は持つのだけれど。やっぱり、こう、なにかしらの動きが見たいと、つい欲が出てしまうのが動画民としての性さがである。まったく、期待とは裏腹で温厚なドラゴンだ。こんなんじゃない。怪獣映画の主役はつとまりそうにない。などという

ジレンマを抱えながら歩みを進めていると、一本道のど真ん中に不思議な人影が見えた。

朱人は一旦スマホを山の方へ向けるのをやめ、その人物を注視する。

距離にすると一メートルほど先。行く手を阻むかのよう^{ただず}に佇んでいる。

それはまるで幻想だった。

キラキラと煌めく薄く長い金髪。遠目からでもわかる綺麗なエメラルドグリーンの瞳^{ひとみ}。鼻筋の整った顔立ちに、透き通った白い肌。

そして特徴的なとがった耳――

まぎれもない絶世の美女だった。朱人でなくても彼女

を見たら誰しもがこう言うだろう。

エルフがいる——と。

疑う余地もない。それくらい高貴で神々ごうごうしいオーラを彼女は纏まとっている。服装だつてこの世界のそれじゃない。緑と白を基調としたロングフリンプース調の衣装。胸や腕には鉄製の防具がつけられている。さすがにあれをコスプレしというにはクオリティが高すぎる。そもそもこんなド田舎にコスプレをした美女がなぜ……ということを考えれば、必然とたどり着く答えは一つ。間違いなくあれが本物のエルフだということ。

カメラ越しに彼女の姿を確認したりスナーも同じことを思ったのか口をそろえる。

『え!?! エルフいない!?!?』『ざばwww』『エルフじゃ
んwww』『まじwww』『ドラゴンの次はエルフが
よwww』『オーラやべーwww』『ドラゴンの
飼い主^{ぬし}キタ——!』『よく見えんからもっとう近づけー!』
『おい、朱人話しかけるー!』

ドラゴンが出ただけでもパニックだというのは、次は
エルフである。もう日本はどうなってしまったているのだ
ろうか。ファンタジー世界から修学旅行にでも来ている
のか。

エルフは遠く山の方を見つめている。ドラゴンのいる
方角だ。

関係ないが横顔がすさまじくかわいい。さすがエルフ

だけある。身長も高く、山を見つめる姿がさまになって
いる。

エルフはこちらに気づいていない様子だ。朱人はさながら
芸能人にでも会ったかのような高揚を抱きながら、
彼女の方へと再び足を動かそうとした。

しかし、一歩目が地に着く前に、彼女のそばにその奥が
らクラクションの音が鳴った。

見ると、軽トラックがエンジン音をうるさく響かせな
がら止まっている。

つまり、朱人とは反対側からやってきた軽トラックが、
道のど真ん中で突っ立っているエルフのせいで立ち往生
しているのだ。

田舎と軽トラといえば黄金コンビなんて呼ばれるくらい
のツーマンセルなわけだが。エルフと軽トラなんての
はさすがにお茶でも吹き出したくなるほどの不釣り合い
な光景である。

再び鳴ったクラクションにようやく振り向くエルフ。
朱人の位置からは後頭部しか見えないが、彼女はおそら
くキョトンとした顔で軽トラックを見つめていることだ
ろう。

「なんでしよう、この不細工な鉄の塊は？」……頭の中
でアテレコしてみると面白いほどじつじつとくる。

運転手は運転手で、おかしな格好をした外国の美人さ
んにイライラしているに違いない。その証拠に、いつま

でたつても動こうとしないエルフに痺れを切らしたのが、
ドアを乱暴に開けトラックから降りてきてしまった。
四十代くらいの、なかなかハンサムなおツサンである。
白いタンクトップからは膨らんだ筋骨隆々の二の腕が
覗いている。

「おい、邪魔だからそこをどけ！ 日本語わかるか!?!」
運転手の男は右手をポケットに突っ込み、左手で、端に
寄れとジエスチャーしながらエルフに迫る。しかしエル
フは状況が理解できているのかいないのが、まったく動く
そぶりを見せない。

これは、ちよつと助けてやるべきか……と、朱人が思っ
たと同時に、エルフがふいに右腕を軽トラックに向け、

手のひらを開いた。

すると、突如として風が放たれトラックを包み込んだ。トラックが宙に浮く。

運転手の男が目を丸くしている。朱人も同じく目を丸くしている。

風はトラックを一瞬にしてサッカーボールほどの小さな鉄くずに圧縮してしまった。まるで質量というものを無視するかのようだ。密度濃く、ギシギシだ。

球状になった元トラックはガイーンと金属音を立てたあと、コロコロと地面へと転がった。

そしてエルフが言った。

「人間の男を発見。確か殺すのはだめだったか」

綺麗で鋭くなまめかしい声。

運転手の男はなにかを悟ったのか一目散に走り出した。そりゃそうだ。目の前でトラック潰されたら誰でも逃げる。

「ちっ……逃げてしまった」

エルフが能天気な声でつぶやく。運転手の男を追うような様子は見せずに、

「まあ、別に構わないか。もっと若い男がこっちにいるし」

エルフは朱人の方へとゆっくると振り向く。

二ヤリと口角を鋭く引き上げ、っっからっっちらを覗いていた。

めっちゃくっちゃ綺麗だ。恐ろしいほどに美しい。これが

エルフが……と、男の本能に負けている場合じゃない。朱人は数分前の自分の思考に笑いそうになっていた。なにがキョトンとした顔だ。

キョトンとしてしている奴が、あんな目をするはずない。冷たく、鋭く、座っている。

感想は一つ。

「こわいこわいこわい、なんかこわい！」

『なにが起こったの？』『なんかやばくね？』『よく見えな
い』『朱人ちゃんと映せ』『エルフがなんかしてなかった？』『
トフラシックしぶしてなかった？』『え、なにそれ怖い』『状況
がわからん』『ちちゃんと実況しろよカス』『やばいぜっっ』『
わからん』『いれまじでやばいぜっっ』

朱人の右手に握られたスマホの画面に大量のコメントが流れている。

しかし、もうそんなことを気にできるほどの状況でなかった。明らかにやばい香りがしているのだ。あのエルフは想像上のエルフとはなにか違う。

人の悪意や敵意に敏感な朱人はすぐに悟った。

「うん、よし逃げよう」

即座に朱人は振り向き、走り出した。

一目散に来た道を引き返す。

走って走って走りつくし、いっさい一切、うしろを振り向かずに走る。ガムシヤラに走る。

その最中、後方からけたたましい、なにかの泣き声が

聞こえる。台風で吹き荒れる強い風が細い路地を通る時と似たゴオオオオという音の中に甲高い金属音が混じったような恐ろしい鳴き声。振り返らなくてもわかる。ドラゴンのものだ。

朱人は奥歯をギシギシと擦りながら走り続けた。

しばらく走ると、ようやく畑だらけの地域を抜けて細い道と交差する大通りの陸橋が見えてきた。助けを求めたいが、相変わらず車は通っていない。かといって体力も限界である。そのうち通ることを期待して橋の下で身を潜めることにした。

陸橋の陰に隠れながら、恐る恐る道を覗いてみる。

エルフの姿は見えなかった。なんとか撒いたようだ。

そう安心したところで、先ほど聞いたけたたましい鳴き声が再度、空に響いた。朱人が上を見上げると、ドラゴンが山から離れ、小熊市の空を旋回していた。

そのドラゴンが急に空中で止まる。そしてドラゴンの前に竜胆色りんどうに光る魔法陣が浮かび上がり、本日二度目の閃光が走った。

強烈な破裂音が空気を揺らし、大きな衝撃が地面を通して伝わる。

「なんだよ……あれ」

ドラゴンの口から放たれた青白いレーザーが魔法陣を介して地上に降り注ぎそそ、山を燃やした。荒々しい炎が山を包みながら空を赤く光らせる。

ドラゴンの口元にはゆらゆらと蒸気が立ち込めていた。「なんでだよ……ドラゴンは大人しいんじゃないのかがよ」

東京のドラゴンとはまるで違う。凶暴で、恐ろしく、攻撃的な態度。

先ほどまで大人しくしていたのが嘘うそのようだ。そして、ようやく朱人はあることを確信した。

震える肩は止まらない。

奴らは『敵』だ。



普通の高校生が異世界人と
コンタクトとってみた



夕立朱人ゆうだちあかひとには大嫌いなものが三つある。

一つ目は『三次元の女の子』だ。かわいければなおのこと。

小学三年生の頃ころである。

学校の遠足で近場の山へと登ることになった。小熊市おぐまでは小学生の時から登山を経験するなんてことは普通で、朱人の通う小学校でも例外なく三年生からの行事に組み込まれていた。

朱人は仲のいい男子と道中の虫を捕まえたりして登山

を楽しんでいた。土をいじくって／＼／＼／＼ズを手にとったり、ダンゴムシの背中を叩いて丸くしたり。わざわざいなごでも面白く、仲間と笑って騒いでいた。

そんな往路の中腹に差し掛かった時であった。

朱人の前を歩いていた女子が木の根に足を取られ転んでしまった。

朱人は咄嗟に彼女に駆け寄った。朱人の大好きなご当地ヒーロー、オツグマンがいつも言っていた。困った人がいたらすぐに助ける！それがヒーローだ！と。だから朱人は誰よりも早く、尻もちをついている彼女に手を伸ばした。

女子は差し出されたその手を掴もつと腰を浮かす。

しかし彼女は朱人の手に触れる直前で声を上げた。

「きちゃっ！ 朱人くん汚い！！」

やまびこが返ってくるほど、その場一帯に響く声。

さんざん土をいじくり、虫を触ってきた手のひらは確かに真っ黒で、お世辞にも綺麗きれな手とは言えない。しかし、だからといって……。

すぐさま他の女子が集まりだし、朱人を集中攻撃し始める。

「朱人くん、なにしたの!?!」「おいこー!」「きったなーい!」一緒に遊んでいた男子は朱人を囓はし立てる。

「朱人だっせー!」「女子なんてほっとけよ朱人」「朱人そいつのこと好きなんじゃねーの!?!」

しまいには先生がやってきて、ロクに現場も見えてなかつたぐせに知ったような口を叩き出す。

「こら、夕立、遠足だからってはいしゃぎすぎるんじゃない！ 女子には優しくしろっていしゃ言ってるだろ」

朱人は必死に弁明したが、遠足の高揚感からか周りはこちらよつとしたイベントが起こったというテンションでまともに取り合ってくれない。転んだ張本人の女子もそさくさと自力で立ち上がり、お尻に付いた土をポンポンと払うと、たいして怪我^けもしなかつたのだろう、何事もなかつたかのように女子たちと談笑を始めた。

別に気にすることでもない……朱人もそう自分に言い聞かせた。拒絶されたその手を見て。

それ以降、朱人が日曜夕方に放送しているオツグマンを見ることはなくなつた。

翌年、朱人はアイドルの百枝立花ももえりっかにハマつた。

百枝立花が所属する大人気アイドルグループのMVをYouTubeでたまたま見た朱人は、その五分弱の間で彼女に一目ぼれしていた。当時まだ十四歳の新人だった彼女は、MVの中でもそこまで目立つ位置ではなく、映っている時間も短かつたのだが、朱人の目には百枝立花の姿が誰よりも輝いて見えた。

以後、朱人は小学校を卒業するまでの三年間アイドルオタクとして生活を送つた。ランドセルには百枝立花の缶バッジを大量に付け、学校へアイドル雑誌を持ち込み

休み時間に熟読、遊び盛りの年齢にも拘わらず放課後は自宅へ直帰しコンサートのDVDを毎日のように見る。クラスメイトからは変わった目で見られていた。特に女子からの目線が冷たい。しかし、朱人は別に気にしていなかった。むしろ逆である。立花に比べたら同級生の女子などお子ちゃまにしか見えず、こっちから願い下げだという気持ちだった。

そんな小学生時代だったのだから、次第に周りの男子も離れ、いつの間にか中学校へ上がる頃には友達がい人もいなくなっていた。それでも朱人は充実していた。それぐらい百枝立花に入れ込んでいた。

そんな中、朱人が中学一年生の二学期のことである。

百枝立花に、アイドルとしての宿命ともいえる事件が起こった。

スキヤンダルだ。SNSの裏アカウントが流出し、そこでつぶやかれていたファンをバカにする言葉が拡散されてしまったのである。

——今日の握手会で「将来りっかたんをお嫁に迎えに行くから待っててね」とか耳打ちしてきたガキがキモすぎて吐いた——

清纯派できていた百枝立花にとっては、イメージが覆くつがえされてしまう内容である。

ただし、これが百枝立花のアカウントだという決定的な証拠はなく、本人や所属グループの運営は当然のごと

く事実を否定^{ひてい}。フアンの間でも、幻滅したという批判もあれば、アンチの捏造^{ねつぞう}だという擁護の声も多く、真相は曖昧^{あいまい}なまま。炎上は一時的なもので終わった。

結果だけ見れば、よくあるスキャンダルの一つである……で片付く内容だ。

しかし、朱人にとっては違った。

事件に対しての熱量が他のフアンよりも一段階ほど上であった。

なぜなら、この裏アカウントが百枝立花のものだと確信していたからだ。

朱人はこのスキャンダルを見て、十四回マクラに頭を打ち付け、十四秒マクラに顔をうつずめて叫んだ。

小学生の時からお小遣こづかいとお年玉を必死に貯め続け、
ようやく初めて田舎いなかから東京とうきょうに行けた夏休みのあの日。
念願叶かなって参加できた握手会。目の前には追いついてい
たアイドル。

アイドルとの握手は十秒もない。一度のチャンスに思い
の丈たけを込めるため、前の晩に徹夜でなにを言おうか考えた。
そして、その思いを緊張しつつもなんとか時間内で伝え
ることができた。

そんな思い出のこもった渾身こんしんのセリフが、素性のしれ
ないアカウントのつぶやきで綴つづられていたのだ。

いったいこのアカウントは誰のだ、と考えれば……そ
れはもう十中八九、百枝立花である。百枝立花の裏アカ

ウントであるに違いないのだ。

なんせ耳打ちしたのだ。他者に聞かれないからこそ耳打ちするのである。ならば、その内容を知っているのは耳打ちした本人と……耳打ちされた本人だけだ。

朱人は自分の手を見た。

よくよく思えば、百枝立花は、遠足の時に転んで尻もちをついたあの女子と、よく似ていた――

以来、朱人は三次元の女の子を嫌いになった。

二つ目に大嫌いなものはYOUTuberである。

この理由は単純。自分より再生数を稼いでいる大物YOUTuberへの単なる嫉妬だ。

朱人がYOUTuberとしてデビューしたのは中学

一年の秋。

百枝立花のスキャンダル以降、趣味を失った朱人は虚無感に包まれた日々を送っていた。

学校には友達もいなく常にボツチ状態。今まではそれもアイドルという趣味があったから気にならなかつただけで、唯一の生きる楽しみを奪われた朱人にとって、学校は一気に苦痛の場と化していた。

そんな苦痛と退屈を紛^{まぎ}らわすために見始めたのがYouTubeの動画だった。

別に画期的に面白いわけではなかった。しかし、嫌なことを忘れてボーっと見るにはちょうどいい退屈しのぎだった。

Y o u T u b e r のほとんどは素人^{しろうと}がやっついて、その動画のクオリティは高いものもあれば、とてつもなく低いものもあるピンキリ状態。

次第に朱人は自分でもできるんじゃないかと思い始めた。

親に頼んでWEBカメラと編集ソフトを購入し、早速、動画を一本撮ってみる。一人で撮る動画なので大それた企画ものなどできず、とりあえずは「ただ喋^{しゃべ}る」という動画にすることにした。内容は百枝立花を叩く動画。

ただ叩くだけでは面白くない。身を削り、噂^{むわし}になっただけ「耳打ちをしたガキ」は自分だと告白して、溜^たまっていたうつぶんを晴らすように徹底的にディスプレイしつくした。

それが意外に好評で、再生数は二週間で十万を超える結果になった。初めての動画投稿としては大成功と言っていい伸び率だ。

朱人が炎上系を名乗り始めるキツカケである。

と、まあ、スタートは良かったのだが、その後の投稿は再生数が伸びず、登録者も全然増えない。生配信も始めるようになりコアなファンや粘着アンチはついたものの、YOUTuberとしては底辺の部類である。その結果、朱人は大物YOUTuberたちに嫉妬するようになってしまった。あんな奴らより自分の動画の方が面白いと日々イライラを募^つらせていた。

どんなものでもそうだ。オーディエンスでいるのとプ

レイヤーに実際なってみるのとは、感じ方がまるつきり変わってしまったものである。

しかしYouTube自体はとても楽しかった。百枝立花を追いかけた時と同じくらい充実していた。その後、朱人は動画制作に夢中になった。高校へは一応進学したが、行くのもだんだんわずらわしくなっていた。そして朱人は引きこもりになった。

さて、三つ目の大嫌いなもの。

異世界ファンタジーアニメだ。異世界ものならラノベでもいい。異世界転生しかり王道ファンタジーしかり。その類たぐいのものだ。

もう気づいているかもしれないが、朱人の大嫌いなも

のとは「元・大好きなもの」である。大好きなものに理想を追い、それに裏切られた結果、評価がクルリと反転する。だからこそ朱人は、絶対に裏切らないもの、天変地異が起ころうとも裏切られようのないもの、すなわち非現実の世界に没頭した。

ファンタジーヴァーチャルアニメーション
幻想仮想二次元……それらは現実にならないもの。現実

じゃないからこそ、現実のように裏切らない。

異世界転生のラノベを読みあさり主人公に自分を置き換え感情移入した。ネットゲームに金をつぎ込み承認欲求を満たした。深夜アニメを片っ端から視聴しヒロインたちを恋をした。朱人にとって、それらは一番の娯楽であり、癒やしだった。

じゃあ、果たしていつ朱人は大好きだったファンタジーの世界を嫌いになったのか。

——今だ。

決して裏切らないはずだったファンタジーが、しかもあのエルフが、優しくて綺麗なお姉さんであるはずのエルフが、トラックぶっ潰すようなDQNだったのだ。

そんなもの聞いていない。エルフはもっとう、こっつ、癒やしちやしの存在のはずだ。聞いていない。断じてあんな野蛮やばんな存在だなんて聞いていない。なんか殺すとかなんとか言っただ気もする。もうこれ以上に理想を壊されたくないからその部分の記憶だけは曖昧あいまいにしておきたい。

まさに異世界詐欺まぎである。

ふと、地べたについていた尻のあたりで微かすかにバイブレーションの感覚がした。ここまで走ってくる間にスマホをポケットにしまい込んだことを思い出し、手に取る。配信が止まっている。サイトで定められている枠内の時間が過ぎたのだろう。

画面上にはLINEのプッシュ通知が映し出されていた。そのままタップして確認する。

『東京タワー見てきたけど、規制が厳しくて近くまで行けなかった』

東京の友人から今さらな返信が来ていた。こっちはそれどころじゃないというのに、間が悪い友人である。しかし、こんなおんきなメッセージが入ってくるといこうこ

とは、東京のドラゴンはこちらと違い大人しくしていることがうかがえる。東京はまだ平和のようだ。

『東京よりこっちがやばい。暇なら助けに来てほしい』友人のメッセージに対して適当に返事をしてスマホをそのままポケットにしまう。そして、朱人は静かに立ち上がりながら気持ちを整理した。

とりあえず逃げよう。エルフもなんか怖いし、ドラゴンがやばい。災害レベルだ。小熊市からできるだけ遠くに逃げるべきだ。電車は動いているだろうか？ 自分が所持している最速の交通手段はママチャリだ。頼りないが生の足を使うよりはマシである。一回家に帰って取ってきたぼうがよさそうだ。

そのためにはドラゴンとエルフに見つかからないようにしなければいけない。

ドラゴンを動かしているのは多分エルフだ。ドラゴンの飼い主とがだろう。ファンタジー世界のエルフは高魔力の持ち主であり、またそれに比例するよう^{そうめい}に聡明である。その魔力と知能があればドラゴンの一匹や二匹、手なづけていたとしてもなんら不思議ではない。

できれば彼女と出くわすことなく、そしてドラゴンにこの町が壊滅させられる前に小熊市を離れたい。

その一瞬の思考が悪かった。なんにも考えずに本能的にその場を立ち去っていれば、最悪なタイミングは逃げていたかもしれない。しかし、結果論にすぎない。

既に目の前ではことが起こっているのだから。

蛍火のような幻想的で仄明^{ほのあか}るい金色の光が、前触れもなく光彩^{こうさい}陸離^{りくり}と浮かび上がる——そして、まるで召喚されるかのごとく、何者かの全身が頭部から順にゆっくりと、白銀に輝く髪——金色の目——小さな顎^{あご}——細い首——白い肩——豊かな胸——妖艶^{ようえん}なクビレ——スラリとした脚——

美少女が姿を現した。

少女と呼称するぐらい、あのエルフよりかは幼く見える。しかし、その美しさはエルフにも劣らず、形容しがたい不思議なオーラに包まれている。神々^{こじじい}しいと表現するのが一番しつくりくるかもしれない。

そんな美少女の姿に、朱人は息をのんだ。

「おや……間違っってしまったようですわ」

少女が朱人を見て小さく漏^もらす。

朱人は咄嗟に彼女の耳の形を確認した。……とがって

はいない。普通の耳だ。ということはこの少女はエルフ

じゃない。だけれども、こんな登場の仕方をされたら察し

はついてしまう。向こう側の人間だ。間違いない。種族

はエルフじゃなくとも、エルフと同じ世界から来たに違い

ない。だとしたら今この場で朱人がとる行動は一つだ。

朱人は走り出す。

冗談じゃない。これじゃ異世界からの修学旅行ではな

く襲撃旅行だ。

既に朱人の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。照り付ける日光、田舎くさい土の匂いにお、肌をなでる風。どれもが不快に思え、吐き気をもよおす。

振り返ると、銀髪の少女がこちらに向かって走っている。距離を離すことができない。

上空ではドラゴンが町を見下ろしている。

詰将棋つめしよウぎをされている気分だ。

「くそー！ 俺おれがなにしたらっというんだよー！」

普段、家に引きこもりっぱなしで運動なんてしない朱人は、何年かぶりの全力疾走で肺に穴があきそうになっていた。次第に意識は朦朧もろうとし、視界がぼやけ始める。

かすんで見づらくなつた風景の中、かすかに金髪の女性

の姿が見えた。

まぶたを強く閉じ、もう一度しっかりと目に映ったものを確認する。

朱人の心は文字通り真っ二つに折れ、砕け散った。容赦ない絶望が襲う。

そこにはエルフが立っていた。

足を止める……が、日頃ひごろの運動不足がたたき、慣性のいなし方がわからず足がもつれ派手に転ぶ。

エルフが朱人を氷のような目で見下ろしながらゆっくりと近づいてくる。

「それにしても弱そうだな人間だな。若いだけだったか……」
「来るな来るな！ こわいんだよ！ なんかがこわいよー！」

「うるさい豚だ。一人ぐらい殺しても構わないが」
朱人は両の足を絡からませながら、そのままの姿勢でエルフに背を向けた。

しかし、目の前には銀髪の少女が立っていた。

もう一度振り返り朱人はエルフを見た。

終わりだ。もう、どうしようもない。

エルフが朱人に向けて右手をかざす。

もしかしてトラックと同じことするつもり？

朱人は戦慄せんりつした。まだ十七歳だというのは、本当に本当に死ぬのだろうか。もし死んだとしても、こんなエルフがいるなら異世界転生はしたくない。

そんなのんきな思考が死の直前に浮かんでくるだなん

て、案外人間は強いのかもしれない。

エルフの手のひらが開かれた。

「カーソル F D！」
フル・ディフェンス

声がしたのは後方。エルフの右手から、例の『風』が飛んできたと同時に。

『風』は朱人の身体に触れると、硬いなにかと接触しているような派手な金属音を鳴らした。その部分に熱を帯びるのを感じる。しかし、『風』は決して朱人の肉をトラツクのように潰すことなく、そのまま消滅していった。つまり朱人は無傷だ。

呆気にとられる朱人をよそに、エルフが前方を睨み、
口を開いた。

「どうして、貴殿のような方がここに？」

「それはあなたにも言えますわ。エルフ族」

答えたのは銀髪の少女。

「……我々の邪魔をすると言うならば、貴殿であっても
容赦はしない」

「ずいぶん強気ですわね。まあ、私も攻撃手段がないで
すから、ここは引き下がらせていただきまますわ」

そう言って銀髪の少女は朱人を見た。

朱人は、二人の異世界人が交わす言葉を理解する余裕
もなく、ただただ啞然としていた。

「そう、易々^{やすやす}と見逃すのでは？」

「そう思っているから引き下がると言ったのですわ——
カーソル9X^{ナインエクス}」

「……っ!? ステルススキル……極級の補助魔法とは、
さすがの魔力と言ったところか。しかし、我々の
術式^{スペルハック}解読を甘く見ないことだな」

銀髪の少女はエルフの言葉に耳を傾^{かたむ}けながらも、無言
で朱人の腕を掴んだ。

朱人はなにがなんだかわからずに瞳^{どうこう}孔を開かせている
だけだ。

「ほら行きますわよ」

「いや説明！ 説明して！ 説明をしてくださいわー！」

「はあ……あそこのエルフ族には私たちの姿は見えていない。だけどエルフ族は魔法の術式を解読する能力があるから、その効果が解かれるのも時間の問題。これで急がなきゃいけないのはわかりました？ わかったらさっさと行きますわよ」

「雑！ 説明が雑！ そもそもおまえは味方なの!?!」
「面倒な人間ですわね、時間がないって言っているでしょ！ とりあえず走りなさい!」

「ええ……なに、こいつ、こっつわあ……」
仕方なしに立ち上がり銀髪の少女と走り出す。

彼女の言う通りエルフには朱人たちの姿が見えないのか、追ってくる様子を見せない。

直近の死が遠ざかっていくことで、朱人は次第に冷静さを取り戻していった。

「術式を解くとかなんとかが言ってたけど、今はあいつに俺の姿が見えていないってことでいいのかな？」

「だからそうですよ。そういう魔法をかけましたわ。しかしエルフ族は自身の高魔力もさることながら、相手の魔法を解読し無効化することが得意な種族です。三十分もすれば魔法は解かれていると思いなさい」

その三十分の時間が早いのか遅いのかでいったら、多分、早いのだろう。そもそも剣と魔法の世界であるファンタジーで魔法を無効化するなんて技術、早速チート級である。

朱人は改めて考える。やはり一刻も早くこの町から逃げなければ。そのためにも当初の目的地である自宅に向かう。自転車で逃げられるところまで逃げよう。

そう思い、銀髪の少女を見た。

「おまえ……本当にエルフとは関係ないんだよな？」

「しつこいですわね。耳がとがっていないでしょ？ エルフ族ではありませんわ」

「でもエルフと同じ世界の住人なんだろう？」

「厳密にいうとそれも違いますわ」

「……？ じゃあ本当に何者なんだ」

「本当に面倒な人間ですわ……私が何者か一言で簡単に言うよ」

少女はつぶらな瞳^{ひとみ}で朱人を見つめ、言った。
「女神ですわ」



十分ほど経^たったところで自宅に着いた。

銀髪の少女と共に中に入り、朱人はすぐにダイニングに向かい水を一杯飲みほした。ステルス状態が切れるまであと二十分程度。この時間が過ぎる前に、さっさと食料や懐中電灯などの役立ちそうなものをまとめ、遠くへと向かうべきだ。

が……その前にこの銀髪の少女に聞いておかなければ

いけない。

いったいなにが起こっているのか。

朱人はリビングのソファに座り銀髪の少女を見つめた。

「家族はいませんか？」

なんて、のんきなことを聞いてくる。

「わけあってみんな海外。ここには俺一人で暮らしてる」

「寂^{さび}しい人生ですわね」

「ええ!? おまえ本当に女神なの!? こっわ！」

「疑うのですか？ ムカつく人間ですわ」

「それ！ それ！ そんな毒舌な女神いるかってことだ

よ！ 俺、女神ならもっとう、こっわ、癒やし系のフワフワ

した女神がいい！」

「わけわかりませんわ。なんですのフワフワって。なんか、あなたムカつきますわ!」
頬ほおを膨ふくらませる女神。ともかく、この状況を把握することが先決だ。

「いったいおまえたちはなんなんだ?」

「あのエルフ族……そしてドラゴンは『アサルカルド』という世界からやってきたのですわ。あなた方で言う……異世界ですわね」

「それしか説明はつかないだろうけど……マジで異世界かよ……」

「私はアサルカルドの生命を司しかなわる女神の一人で、厳密にはアサルカルドの住人じゃありませんわ」

「そのアサルカルドってところがらあのエルフは俺らの世界になにしに来たの？ 友好関係を結びましようって気構えじゃないっただけはわかるけど……侵略に来たとか……？」

「ま、そんなところですよわね」

「軽っ！ え、軽っ！ そんなところですよ……じゃないのよ！ 侵略って言葉わかってるのおまえー！」

「わかってますわよ。バカにしているのですが？ ムカつきますわ！」

侵略……。

魔法を使える異世界の住人なら、この世界の侵略も容易に可能だということとは考えなくともわかる。

「てか、エルフの動機は？ 実物のエルフって魔王みた

いに世界征服したがるキャラなの？ なにそれ怖い」

「別にそういつたわけではないですわ。まあ、一言で言うなら、エルフ族の男に飽きた……って感じですよわね」
「んん？ どういうこと？」

「そのままの意味ですわ。エルフ族の女性は性欲が強いんですの。もう彼女らの相手をできるほどの屈強な男エルフはアサルカルドに残っていませんわ」

「スケベエルフじゃん！」

女神が眉間みけんにしわをよせて朱人を見た。

「なにを言ってますの？」

「いやスケベエルフじゃん！！」

「だからなんですのそのそのスケベエルフっていつのはー！」

「スケベエルフって実在するのかよ……いやエルフ自体
実在してるのがもうおかしいんだけど……ていうか男漁り^{おじいあや}
ついでに侵略しに来たってことがよ……ぶっどびすぎだ
ろ異世界」

「あなた普通に無視してきますわね、ムカつきますわ。
正確には強い男の遺伝子を求めているのだと思いますわ。
そしてこの世界——私たちはエクド界と呼んでいますが、
このエクド界で新たにエルフを繁栄させる気がと」

女神は少し不機嫌そうに言った。

「それで女神のおまえはエルフを止めに来たってことで
いいの?」

「そうですね。エルフ族がエクド界に来てしまった

原因は多少女神にもありますから」

「原因？ なにそれ？」

「あんまり説明はしたくないのですけれど………あつ、これですわ。まさにこれ」

急に女神が前のめりになり、テーブルの上に放り置かれていた文庫本に手を伸ばした。白銀の綺麗な髪が朱人の鼻をかすめる。爽さわやかないい香りだ。

女神が手にかかげた小さな本の表紙には、大きな剣を手にした前髪の長い美少年と、胸元むなもとが大きく強調されている巨乳美少女のイラストが描かれていた。

タイトルは『ニートが転生したら異世界で最強剣士でした』¹³』

朱人が集めている異世界転生物のライトノベルだ。

ちなみにこのラノベは現在十三巻まで出ていて、その最新巻をちようど読み進めているところである。たまたまリビングで読んでいたものがテーブルに置きっぱなしになっていたのだ。

「私たち女神は基本的にはアサルカルドの信仰からなる存在ですが、エクド界の様子もよく知っていますの。これ、今とても流行はやっていますわよね？」

「うん、まあ流行ってはいえるかな。書籍化される前は『作家になりたい』のサイトでも一番人気だったし、つい最近アニメ化もしたから知ってる人は多いと思います」「そうじゃないなくて、この作品だけのことではなく、こう

「いうジャンルがここ最近この国で流行っているという
ことですよ」

「ジャンル分けするなら異世界ファンタジーが、異世界
転生物が、はたまた異世界転生チート物？ 彼女が指し
ているのはそういうことだろう」

「アサルカルドで、これのマネをする女神が増えましてね」
「マネ？」

「ええ。ようはエクド界から人間の魂を拾ってアサルカ
ルドへ転生させるのが女神界でちよつとしたブームにな
っているんですよ」

「異世界転生が本当にあるってこと!?! マジかよ、え、
じゃあ聞きたいことあるんだけど、言葉って本来なら通じ

ないよね？ こっちの創作だとそこ曖昧になってることも多いけど、実際の転生者たちってどうしてるの？」「女神はそれぞれの世界に対応できるような言語統一の魔法を使えますの。事実、あなたと今お話できていますでしょう？ 転生者にもその魔法を使っているのですわ」「へーなるほど。それにしても面白い話だな。妄想の異世界が本物の異世界にマネされ影響を与えているわけか。でもそれのなにがエルフと関係してるんだ？」「そのせいでエクド界という世界が存在することがエルフ族に知られたのですわ」「情報セキュリティ甘っ！そこは隠す努力しろよー！」「それだけじゃありませんわ。女神の中で転生者のこと

を気に入り、アサルカルドへ降り立って共に冒険をする者が何人かいたのですわ。その際にエルフ族とガールズトークに花が咲いて、ついべラべラと異世界間の転移の仕組みを漏らしてしまった女神がいましてね」

「セキュリティとかのレベルじゃない！ ガールズトークで！ いや、ガールズトークで！！ なめてんのか！！」

「結果、術式スぺルハック解読が得意なエルフ族は、女神にしかできなかつた世界転移の魔法を独自で編み出したのですわ」

「エルフ……さすが、恐るべしだな。まあ、ガールズトークで漏らす女神が悪いんだけどな！ 原因どころか大元凶だけどな！」

朱人はようやく、女神が原因という言葉の意味を理解

した。

「じゃあ尻ぬぐいで、女神たちがエルフの侵略を阻止してくれるんだよな。他の女神ももうこっちの世界に来てるの？」

「エウド界に降りてきたのは私一人ですわ」

「え？ 他の女神は？」

「彼女らはこの件について動く気はありませんわ」

「んんんんん！？ え、エルフ一人なら女神一人で十分ってこと？ それなら心強いけど」

「いえ、残念ながら……そもそも、こちらに来ているエルフ族の正確な人数は把握できていませんので」

「やばい、言っている意味が全然わからない」

自分たちの失態が要因で、一つの世界が侵略の危機に陥^{おちい}っているのに、仮にも神という存在の者たちが動かかないとはいったいどういうことか。朱人はその理由の見当もつかなかった。

「ここでエルフ族の行動を咎^{とが}めるような動きを女神陣営が見せると、おしやべりな女神の失敗を認めることになるのですわ。ならば、エルフ族がなにをしようとして初めから女神は動かない、つまり神の位の者はいついかなる時も世界の傍観者であるというスタンスを貫くことにした……というわけですわね」

「なるほどなるほど、それなら納得……するかつ！
典型的な社会の闇^{やみ}！ いや神界の闇！」

「だけど、これは私たち女神が引き起こしたも同然のこと。他の女神が動かなくとも、私がエルフ族を必ず引き止めますわ」

銀髪の少女の目はまっすぐで、とても力強いものだった。毒舌気味で女神らしくないと思っていたが、意外に真面目な面も持ちわせていることに朱人は少し驚いていた。しかし、いくら女神でもたった一人でエルフを止められるのだろうか。それに……。

「女神って強いのか？」

神なのだから弱いということはないだろうが、相手は高魔力保持者のエルフ。それに、なぜこの女神はさつきエルフとの対面時に、引き下がるという選択を取ったの

「うるさいですわね。説得すればいいだけですわ」
だめだこの女神。お人好ひとよしなのか考えが甘すぎる。
朱人は少女の言葉に頭を抱えた。

「そもそも、それなら女神はなんの魔法を使えるって
言うんだよ……」

「主にスキルアップや能力補助といったサポートですわ
ね。女神は魂にステータスと能力を授まけるのがお仕事で
すのよ」

そうりゃそうだ、と朱人は半ばあきらめ気味に思う。
「ちなみに先ほどエルフ族が放った風魔法を受けてもあ
なたが無事だったのは、あなたの特殊防御数値を一時的
に最大まで上げたからですわ。えっへん」

「そりゃどうも、助かったよ……」

いったいどうしたらいいのか。わざわざ侵略しに別の世界まで来るエルフが女神の説得を素直に聞くとは思えない。やはり人間がどうにかするしかないのか。人間がエルフと戦うと言ったら兵器を使うしかないだろう。

「核兵器……」

「無理ですわ。核兵器ではエルフ族を止めることは不可能ですわね」

朱人の思考を読んだかのような返答が返ってくる。

「……そ、それはまたどういった見解で？」

朱人は苦笑いしながら聞いた。その返答は多少予想していた。予想していたからこそいざ断言されると、笑え

ないものである。

「単純ですよ。核兵器の火力ではエルフ族にダメージを与えられませんか」

「嘘うそだろ……それはいくらなんでも」

「アサルカルドの攻撃とは単純な物理的火力と魔法の術式が絡み合って初めてダメージに結びつきますの。確かに核兵器の火力ならアサルカルドの極級火炎魔法に匹敵ひつてきするほどのエネルギーを持っていますけれど、術式が絡んでいない以上、シールド魔法を張られたら終わりですよ。シールドを貫通できるエネルギーには達しないことですよ」

そこまでアサルカルドとエクド界には差があるのだと

彼女は語る。

これが世界の壁である。

「それにエルフ族はアサルカルドーの高魔力保持者ですから。術式スペルハック解読が速く、そもそもアサルカルド内の強者つわものでも彼らにダメージを与えることは困難なのですわ」
手の打ちようがないという。まるで死神にでも目を付けられてしまったようだ。朱人はソファにもたれかかり目をつむった。

「死神か……。いや、ちよつと待てよ！ エルフつてのは即死魔法とかも効かないのか!？」

「……？ いえ、エルフ族は長寿であつても不老不死ではありませんので、即死魔法も効くことは効きますわ。

しかし、術式解読スペルハックされる前に命中させるのがまず無理でしょうね。そうでなくとももともと即死魔法は命中率低いですし」

「術式解読スペルハックつてのをされなくて、なおかつ確実に当てることができれば、いくらエルフとはいえ死は回避できないってことだな……」

朱人はリビングを出て自室へと向かった。そして数十秒もしないうちに、一人残されていた少女の元へと戻ってきた。右手に小さなマスコットを握りしめて。

「それは……なるほど、そういうことでしたのね」
少女が朱人の右手を見て、なにかに気づいたように一人つぶやく。そして、こう続けた。

「私はこの世界に降り立つ時、魔力をたどって転移してきましたわ。しかし、私の目の前にいたのはエルフ族ではなく人間のあなただった。……私が察知したのはエルフ族の魔力ではなく、その人形から発せられている呪力だったのですね。そして、その元となっているあなたの魂の近くへと転移した……」

「転移の仕組みがどうたらってのはよくわからないけど、女神にもこいつのヤバさは伝わるんだな」

「とても強力で、まがまが禍々しく、アサルカルドでは見たことのない異形な力を感じますわ」

少女が低い声で言う。

朱人は手に持つオツグマンをギュッと握りしめた。

「このオツグマンは俺が受けた呪いの力を抑えている」

「あなたが受けた呪い？」

朱人はシャツをめくり、胸の傷を少女に見せた。

「これだ」

「うわ、きもいですわ」

「鬼が！」

「なんですの、その傷」

「都市伝説のひきこさんてのに魅入られたんだ。今もひきこさんは俺に憑ついている」

「どこにもそついった類の気配は感じられませんけど」

「近くに住む有名な霊能力者に頼んだのさ。怨おんじょう霊の本体

はその人のいるところに封印されている。だから、そこ

に行つてこのオツグマンのお札を剥^はがせば呪いが復活する。エルフでも呪いの力にはかなわないだろ」

「……確かに。アサルカルドにも呪いという概念はありますけれど、それは術式により生まれるもの。しかし、その人形に宿っている呪いは怨念そのものですわ。エルフ族も術式でないものを防ぐことは困難でしょう」

「だけど怨霊の本体のところまで行つて封印を解けたらの話だ。説得しても、あのエルフが聞いてくれるとは思えない。俺は……奴らと戦うべきだと思つ。頼む力を貸してくれ」

女神は顎に手を当てて少し悩むと、静かに頷^{うなず}いて言った。「そうですね……わかりましたわ。私があなたを補助

魔法でサポートしてエルフ族の攻撃が当たらないように
しますわ。私はエルフ族への攻撃はできませんが、あな
たを守ることはできますわ」

決まりだ。生身の人間と、補助しかなない女神。こ
のコンビでエルフを倒すしかない。

「だけど、ひきこさんは本当に殺しに行くと思う……工
ルフは多分死ぬことになる。それでも大丈夫？ 俺はち
よっと抵抗あるけど……」

「強気だったり弱気だったり、よくわからない人間です
わ。態度の割には意外と繊細なんですのね」

「は、は!?! 別にそんなことないですけど!?!」

鋭い女神に動揺する朱人。そんな朱人の横で女神は話を

続ける。

「そうなたら私が生き返らせますから大丈夫ですわ。私は生命を司る女神ですからね。エルフ族も一度死を経験すれば改心するはずですわ。改心しなくても次は生き返らせないと脅すだけですよ」

「おまえ……本当に説得する気あったの？ 発想がヤクザだよ。怖いよ」

「あなたが言いだしたことでしょっ!? めんどくさい人間ですわね！ あ、それと私はアサルカルドの女神ですからエクド界の理ことわりにそむいて勝手にエクド界の人間を蘇そせい生したりできませんわ。攻撃魔法を使った時と同じように神の位を落とされますわ。つまりあなたがエルフ族

に殺されたらそこで終わりですので気をひきしめるようにお願いですわ」

「そ、そうなんだ……よし、わかった。じゃあ、ちよつと来てくれ」

そう言って朱人はソファから立ち上がった。

朱人の背中を見ながら女神が口を開く。

「そういえば、名前を聞いていませんでしたわ。急なことははいえ共闘する仲になったのですから、教えてくれますか？」

朱人は振り返って女神の顔を見た。

「夕立朱人。おまえは？」

彼女は今日一番の笑顔で答えた。

「クラマですわ」

なかながカファイイ笑顔もできるらっしー。



体育の成績2の男が
生身でエルフと戦ってみた



「これはなんでしよう。たくさん文字が流れてきますわね」
クラマがパソコンの画面に向けて「ヨヨ」と顔を押し
て言った。

朱人あかひとの頬ほおに銀色の煌めきらく細い髪かみが触れる。

「おおおい、近いよ！」

「うるさいですわね。童貞どうせいですの？」

「ど、ど、ど、ど、童貞どうせいちゃうわ！ アホか！ おまえ

はバカか！ アホか！ アホか！ いやアホか！」

鼻で息をしながら、朱人はパソコンの前でWEBカメラ

ラの角度を調整する。

『結局あのあと、どうなったの?』『エルフは?』『てか、その女の子だれ?』『なぜ朱人の家に美少女が? しねよ』『その女だれ。朱人に近づくな。しね』『ちやこしくなるから信者は黙ってる』『は? なんで美少女? しね』『朱人なにそのかわいすぎる美少女? なめてんの?』『朱人しね』『しね』『しね』『しね』

「なんか、すごい罵倒ばかりですわ……これはどなたかがコメントしているのでしょ? 嫌われていますわね」

「なんだ仕組みわかってるんじゃない」

「普段エクド界の様子も見ているので、ある程度は……

しかし、詳しくまではわかりませんわ。具体的にこれは

なにをしているんですの」

「生配信つてやつだよ。インターネットを通して俺おれの日常を中継して、見てるやつらと会話したりしてるの」

「なんのためにそんなことを？」

朱人は少し考え込んでしまった。なぜだろうが。

YouTubeの動画投稿なら一応多少なりとも収入になるという名目があるが。

「承認欲求を満たすため？」

とりあえずひねり出した言葉はとんでもなくゲスなワードになってしまった。

「そっつですか」

クラマの顔を見ると「ゴッ」を見るような目をしていった。

「そんな顔するなら初めから聞かないでくれる!? なんなのこの子、え、すごいムカつくー！」

「しかし、承認欲求を満たすためにやっている割には逆に拒否されているような言葉が並んでいますわ。嫌われていますわね」

「それさっきも言った！ 聞き流したのに二回言った！ まったく……これでもいいんだよ。これが俺のやり方なのー！」

朱人は不貞腐れて言う。

『無視すんな』『しね』『その美少女だれだよ』『幼女たんハアハア』『幼女ではないwww』『朱人しね』『だれが説明しろ』

朱人は一度気持ちを落ち着かせて、改めてパソコンの前に向き直った。

「とりあえずおまえら聞いてほしい。今から話すことは
全^{すべ}て事実だ」

ゆっくりと口を開き、朱人は自分の身に先ほどもで起こ
っていたこと、そして女神の少女に聞いた話の全てをリ
スナーに向けて語った。

『妄想乙』『いつもの妄想』『早く病院行け』『いや実際にド
ラゴンとかエルフ出てきてるんだから妄想じゃないだろ』『
むしろきの配信見たやつはわかると思っけどこれには本当
っぽい』『でも、本当だとしたら天国じゃない？』『確かに、
エルフの性奴隷……ありがもゴクリ』『私^{わたし}を奴隷にし
て！』『エルフに支配された世界それは男の楽園』『ここに
はドMしかいねーのかよw』

「きもちわるいですわね」

『クラマちゃんキタｗｗｗｗ』『意外と毒舌ｗｗｗｗ』だがそこがいいｗｗｗｗ』『もつと僕を罵ののしってくだしいい』『おまえら自重じちようしろｗｗｗｗ』『ドムどもだまれｗｗｗｗ』『僕はエルフよりクラマちゃん派ｗｗｗｗ』『私も女神派ははつ閥はつに入りますよ、ええ』

「言っときますけど、エルフ族は優秀な遺伝子を残すために選民をすると思いますわよ。選ばれなかった男性をどう扱うかわかりませんわ」

『はい、解散』『残念だったなあまえら』『朱人を含めこのリスナーに優秀な奴やつはいない』『ドンマイ』『ドムたちの夢崩壊』『靴を舐なめるだけの役でいいんでお願いします。』

『筋金入りwwwwww』『ていうかクラマちゃんはあれだな、ツンデレだな』『確かに、俺たちのこと心配してくれちゃって、もう』『典型的なツンデレ。最高』『間違いない』

「ツンデレってなんですか？？」

「ツンツンしてデレデレするさっし」

「は？ ぜっんぜん意味がわかりませんわ。あと、そういえば今何時ですか？？」

「ん？ えっと……十四時半すぎ」

「しまった、体操の時間ですわー！」

「体操の時間!？」

「最近ちよつと運動を怠おこたっていたので、エクド界へ降りてくるのに備えて、おやつ前の体操をルーティンにして

いるのですわ」

「へー意外と律儀なんだな。いつからやってるの？」

「昨日からですわ」

「二日目！ ルーティンにしてるよ豪語するにはまだ早い！」

朱人を無視して、その場でクラマは膝ひざを曲げる上下運動を始める。

「ふん、ふん、ふん」

「え？ なにやってるの？」

「スクワットですわ」

「いや、スクワットじゃない！ 体操じゃないじゃない！」

人はそれを筋トレと呼ぶのだ。体操とは呼ばない。

「なんですの！ エクド界ではエクササイズ女子が流行はやってるって聞いたからやっただのに！」

「動機変わってない!? てか、どこ情報だよ！ 確かに最近インスタでジムの様子上げてる女子多いけどねー！」

「じゃあ、エクド界では今どんな女子が人気ですの?」「うーん、どうだろう、と朱人は少し考える。

外には出ないが、その分ネットを漁あひらりに漁っているの
で、ある程度の流行はわかっているつもりだが。

「ウザかわ系……?」

「あー、お友達の妹とかだったらむしろにかわいいですわね」「唐突にピンポイント狙ってきたな！」

「……?」

「とぼけた顔するな！ てかエルフが攻めてきてるってのにこんな無駄話してていいのか？」

「大丈夫ですわ。もうとっくに試読版のシーンは終わってますから。今は宣伝用の雑談ですわ」

「衝撃のメタ発言！ え、なに！？ いつから!?!」

「スクワットのくだりからですわ」

「だろうな！」

「なんか作者さんがスクワット女子フエチらして」

「スクワット女子フエチってなに!?!」アおぎむるだろ！」

初めて聞いたよ！」

「実はメガチャンネル以外にも、とても長いタイトルの作品をもう一つだけ賞へ応募してたらしいんですけど、ど

そのヒロインにもスクワットさせてみたいですよわ」

「作者気持ち悪いな！」

「ちなみにそちらの長いタイトルの方が大本命だったらしくて、二次選考でメガチャンネルしか残らなかつた時点で諦めて、応募したことすら忘れていたらしいですよわ」

「いや、思い入れなさすぎだろ……」

「スケベエルフが攻めてくるなんてふざけた話が受賞するわけないって」

「ボロクソ言っつな！——応俺主人公なんだけどー！」

「なので編集さんから電話来た時も悪徳業者の営業電話だと思って切る気マンマンだったらしいですよわ」

「酷い作者だな！ ていうか試し読み終わったからって

怒涛の勢いでメタ発言しすぎじゃない」

「それでいうとさっきのお友達の妹の件ですけど、某ウザかわ系人気作品をチエックしてる人は割とメガチヤンもチエックしてくれてる人が多いらしいって」

「それは嬉しいことじゃないか」

「媚びましたわ」

「言うな言うな！ そっつことを堂々と言うな！」

「朱人……………言わされてるのですわ。変態作者に！私も操あやつられているのですわー！」

「……………確かに！ 怖い……………ホラーだったのかこれは……………」
「そして、朱人気づいていますか？ さっきから全然、地の文が出てきていないことを。完全に面倒くさがって

ますわ」

「本当だ、セリフしかない。二次創作のSSみたいなになってる！」

「メガチャンの宣伝だっついていっているのに手を抜いて……クズですわ。朱人以上のドクズですわこの作者」

「ちょっと待てクラマ。ナチュラルに俺のことをクズ扱いしていることはひとまず置いておいて……もしかしてこの作者、ドMとかじゃないよな？」

「はっ！ まさか……それで私にドクズなんていうセリフを……！」

「マジで気持ち悪いな！」

「コメディだからってなんでもやっついていいと思ったら

大間違いですわよ！」

「だいたい本当にこれコメディなの？ 俺殺されかけてるんだけど？」

「あー、それ著者紹介でも言われてましたけど、元々はこの作品シリーズだっただけらしいですわ」

「この内容で!? スケベエルフがシリーズに攻めてくるの？ 逆にシユールじゃない？」

「そもそもスケベエルフなんて出てこなかったらいいですわ。普通のエルフが攻めてくるだけですよ。この話でも最初にトラックが丸く潰されていたでしょっ?」

「あー、タンクトップの運ちゃんか軽トラな」

「あれ、本当は運転手、中に入ってたらしいですわ」

「え、ガチじゃん」

「トラック潰す前に運転手の右腕も風魔法で切断してるらしいですわ」

「ガチガチじゃん！！ いや、ちよつと待てよ、風魔法ってことはあのエルフの設定自体は変わってないってことだよね……え、この先の俺大丈夫だよね？ コメディになっただから大丈夫だよね!？」

「……」

「無言をやめろ!!」

「まあ、話の大筋は変わってないらしいので……」

「三点リーダをつけるな。含みを持たせるな!」

「結局他のレーベルの評価シートでコメディのほうが

向いているって言われて、好き勝手「メデイ」に書き直してたら偶然こんなになっただらしいですわ」

「偶然できたのかよ！ 好き勝手しすぎだろー！」

「偶然できたとはいえ、せっかく刊行することになったのですから、たくさん買ってもらえるように宣伝しないのですわ。クズで変態の作者には頼ってられないですがらね。ほら朱人、得意の売名ですわー！」

「あ、おう、任せろ………か、買えよクズども」

「売名下手ですの!?!」

「そんな急に言われてもできないよー！」

「じゃあ、あ、あれですわ、ネタバレしちゃダメー！ オチ言いましろうオチー！」

「バっ！ やめろっ！ バカがおまえは！」

「たいした話でもないでしょういいですわ！ もしかしたら本作で重要な男子が死ぬかもしれないわ！」

「バカヤロウ！ ネタバシするなっ……ん？ ちょっと待って聞き捨てならないんだけど。ん？ もう一回言ってみて、ん、ん？」

「本作でじゅーよーなあー、引きこもり男子が死ぬかもしれないわ！」

「属性が増えたよね！ 着々とのを絞ってきたよね！」

「ヒント、主人公！」

「うん、それ言うならなんで最初濁にじした？ ヒントって言わないのよ。完全にブルど真ん中ヒットだよね。ズ

キューンと音鳴ったよね！」

「乞^こうご期待ですわ!!」

「よくこんな内容でその言葉、言えたな！」

「さ、本編戻りますわよ」

「ねえ、嘘だよね？ さっきのネタバシ嘘だよね？」

「……」

「……」



(GA文庫大賞《奨励賞》受賞作)

「【配信中】女神チャンネル！ え、これ売名ですよ!?!」7月発売



ゆうだちあかひと
夕立朱人

引きこもりの高校三年生の十七歳。
アンチの多い炎上系底辺ユーチューバーで、
生配信も行う。

女神クラマとともニヘルフと戦つてくたせ。

「ほかの動画も再生数まったく伸びないし死活問題
なんだよ。こんな貧困な高校生いるか？」



GA文庫「【配信中】女神チャンネル！ え、これ売名ですの！？」

クラマ

異世界アサルカルドの女神。

エルフの地球侵攻を阻止するためにやっ
てきた。

「なんですのツンデレって。なんか、あなたムカッ
きますわ！」



GA文庫「【配信中】女神チャンネル！ え、これ売名ですの！？」

ほしざき 星崎ナイト

東京に住む高校一年生の少女。

超能力者として人気のユーチューバー。

朱人は星崎ナイトをディスる発言をして
いるが、相手にしていない。

「これはサイコキネシスとは違う。『流星弾の涙』だ。」

「相手は消える」



GA文庫「【配信中】女神チャンネル！ え、これ売名ですよ!？」

クリフトシーヒ



異世界アサルカルドからやってきた女性。
地球の男を性奴隷にするためにやってき
たスケベエルフ。
貧乳を指摘されるとブチギレる。

「男はできるだけ多く拉致して選民する。そして、
女も殺さない。ガールブトクしたいからな」

GA文庫「【配信中】女神チャンネル！ え、これ売名ですの！？」